文字もじ MOJI の世界

39. デザイン文字の世界　～デザイン書道とは～

直恵＊

名刺交換をした際に「デザイン書道ってどういうお仕事ですか？」と質問されることは多い。デザインを見なかったふりして「書道家さんですか？」と言われることもある。デザイン書道とは何か。説明は非常に難しい。別の言葉で言い換えれば，商業書道であると説明する。すると商業書道とはなんですか，となるのでこれまた説明に困る。そこで仕事の具体例を挙げるわけだが，実はそこに書家，書道家と呼ばれる先生方との区別はないことに話しながら気づく。

私の所属する一般社団法人日本デザイン書道作家協会のホームページには「デザイン書道（商業書道）とは，広告用および広告媒体に用いる“デザイン化された書き文字”のこと」と書かれている。商業書道と言い換えるのが分かりやすいが，商いのための書道と訳せば宛名や賞状の筆耕といった分野も含んでしまうので，やはりデザイン書道はデザイン書道として語るべきであろう。

この記事をきっかけにデザイン書道について興味を持っていただいた方には，2018 年 12 月に発行の『日本のデザイン書道家―筆文字デザインの最前線』（マール社）をぜひご覧いただきたい。この本は『デザイン書道名鑑 2001』以来，18 年ぶりにまとめられた本である。デザイン書道につ

写真 1 『現代の大福帳』耐洗紙の和綴じノート。（株）国宝社提供

写真 2　ロゴ制作事例提供

いてかかれた専門書は非常に少ない。NHK 大河ドラマの題字や有名ブランドの商品ロゴなどを担当した諸先輩方の解説も掲載されているので，面白く読んでいただけるはずだ。

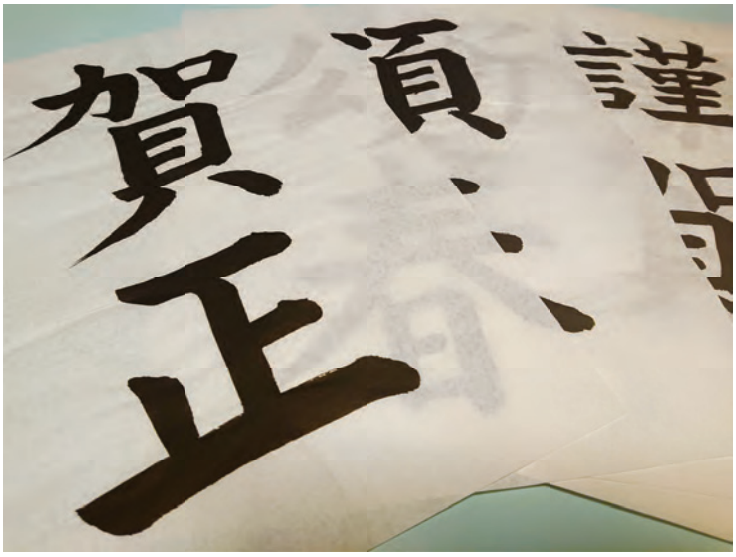

写真３ 『心に残る和の年賀状 令和丑年版』制作時の原本。通常文字の取り込み作業は自宅や一般的な複合機でのスキャン作業で対応しているが，高解像度でのデータ提出が必要となったため，原本を送ることとなった。同一の書体で 16 点を書く

デザイン書道との出会い

私がこのデザイン書道に知ったのは，趣味を通じて知り合った仲間からいただいた雑誌の記事の切り抜きであった。「こんな仕事もあるみたいよ。」と教えてくれたのである。デザイン系の専門誌であったのだろうか。イラストが得意な優しい彼女とは，今では連絡を取るすべもなく，念願の職につけたことを報告できず残念に思っている。

雑誌の記事はアサヒ飲料の「十六茶」の文字デザインを手掛けた，石塚墨禅氏の仕事を取材したものだった。当時私は二松学舎大学の学生。将来のことも考えず，得意であった書道をやりたいという理由で大学を選んだものの，就職などまだ先のことと思っていた。記事を大事にもっていたものの，結局書道関連の職には就かず，寝具メーカーのルート営業として採用された。その後思い出したように書道の仕事を探し始めたのは，出産育児を経た後のことである。私はそこで仕事ではなく偶然にも毛筆デザインを教えてくれる学校を見つけ，即入学を決めてしまった。今はなき母校には「毛筆カリグラフィー＆デザイン」というコースがあった。あの記事の仕事を教えてくれるというのであるというから，不思議な引き寄せを感じたのである。もしあの機会に学ばなければ，私がデザイン書道家になっていることはおそらくなかったであろう。

卒業後，葬儀関係の子会社にお世話になり，葬儀で使用される印刷物や看板を制作することとなった。カッティングやシルク印刷，デザイン入稿後の仕事を知ったことは，今でも非常に役に立っている。その後いくつかの中小企業で広報や社内デザイナーとしての仕事に就き，フリーとなって今に至る。

書道の仕事で思いつくことと言えば，書道の先生である。ではなぜそちらに行かず，商業書道を選んだのか。代筆をよく頼まれていた私は，大人になるにつれアート的な要素を求められる作品作りに違和感を覚えていた。オリジナル作品作りは強いこだわりや，表現したい世界への追求が必要となる。年頃にありがちな悩みを自己の表現での発散よりも，評価により求めていたのだろうと今では思うところである。

作品作りをやめてしまった決定的な出来事は，一番好きな楷書と言われる書体が作品づくりにはむかないと言われたことであった。楷書以外の文字を勉強しなかったわけではない。書道というのは実に幅が広く，楷書，行書，草書，隷書，かな，篆刻っといった分野をそれぞれ専攻している書道家がいる。しかし，美しく書くことで喜ばれたという評価以上に自分には書を続ける魅力がなかった。そこで出会ったデザイン書道は，誰かの役に立つ喜びを感じていた私のやりたいことに合致し

写真４　インスタグラムにて習作を発信

たのである。

デザイン書道と広告

実はデザイン書道は別の世界に置き換えていただければ，非常にわかりやすく説明ができる気がする。写真，イラスト，音楽，この世界にもクライアントの求めに応じて作品を作る仕事は多くある。デザイン書道もその仕事の一つであると言える。クライアントからの依頼には必ず反響，効果に意識を向けなければならない。身近にあるパッケージ，広告に使われている手書き文字は仕事のひとつである。デザイン書道家と名乗るにあたっては，商品を広める役割を担うことを忘れず，常に新しい情報を取得することが必要である。

デザイン書道家にはグラフィックデザイン業界からの出身者も数多くいる。現場のデザイナーたちが必要に応じて筆をとり，その世界を築き上げてきたことは想像できる。私の母校である「MACデザインアカデミー」での恩師はレタリングを徹底的に修練したことを教えてくれた。グラフィックデザインを専門とするコースにはデッサンの授業があった。パソコンの普及によって作業の簡略化は進んでいるが，基礎であるアナログでのデザインの重要性は忘れてはならない。イラストレーター，フォトショップ等のデザインソフトが普及したのもここ十数年のことだ。今になって師の言葉を思い出し，レタリングにも学びを求めているところである。

デザインという言葉には「課題解決」の意味があるという。書で自己の世界を追求することは「アート」であり，私の仕事は書によって課題解決をするという想いがある。言い換えれば広告用の題字制作，企業のロゴ制作といった仕事は，デザイン書道によって課題解決させたに過ぎない。デザイン文字のひとつである以上，既存フォントと比較を行うことも当然である。

さらに知識を深めるならば『描き字の世界』（グラフィック社）がおすすめである。明治時代からの日本を代表する 45 名の仕事が掲載されている。映画好きやテレビっ子にはワクワクするような文字も並んでおり，デザイン書道と広告との関連性がわかる一冊となっている。

デザイン文字に求められるもの

コロナ禍でのオンライン化が進み，印刷物に限らず，今後さらに動画や配信での需要は増加すると見込む。忘れてならならないことは，我々は言葉を扱う仕事であるということだ。急激に普及し始めた YouTube ではサムネイルでの注目を集めるために，タイトルを飾る傾向がある。手書き文字を使用しているケースは非常に少ないが，ここで注目を集める上での言葉の役割を考えることは外してはならない。その上で手書き文字が与える相乗効果を期待したいとも思う。

なぜそこに筆文字（手書き）文字を使うのか。手書きによって人は多くの情報を吸収する。美しい字で手紙をいただいた時の感銘，仮にたとえ美しくなかったとしても，手書きでいただいた手紙に人は心を動かされる。手書き文字が与える情報はフォントよりもはるかに多いのだ。

私は自分の名刺の名前を筆文字で書いている。印刷する度にこのデザインを変更し，自身での広

告実験をしている。「男性的な文字を書かれますね。」と言われることが多い。実際の印象とは違うようでギャップに驚かれる。私のクライントにも筆文字の名刺を使っている方がいるが，この文字をきっかけにお話しをされることもあると聞く。大変うれしいことである。

デザイン文字が使われるメディアや商品には制作，開発に至るまでのストーリーがある。義憤，不便さから生まれ，世に何か訴えたいと情熱を含んでいるものもある。いざそこに名前をつけ世にお目見えする際，デザイン文字によってその商品のイメージを狂わせてはならない。「言葉の意味を考えること」「可読性があること」「品性をもたせること」，私が制作するうえで気をつけているのはこの 3 つである。

特に品性については気を付けていただきたいことがある。デザイン書道には関連するキーワードには「筆文字」がある。この筆文字をとったときに，この分野で仕事をする方々が昨今非常に増えている。しかしながら，基礎の修練をしてこなかった者が多数書家を名乗っている例があるというのが現状である。それは冒頭に挙げた書籍で諸先輩方もおっしゃっていることであるが，私も同様に感じている。有名企業の広告でも残念な筆文字を見ることは度々ある。他のデザインはとても緻密に計算されているのに，なぜこの文字を選んでしまったのかと非常に残念に思う。

デザインの現場において，「仕事を依頼できる書家を知らない」，「外注価格が見合わない」，「納期が間に合わないので自分で書いてしまった」っという声を聞いたことがある。時代は印刷だけでなく WEB を専門にするデザイナーも増えてきている。仕事が増える上で，短期間でもデザイナーになれるとうたっている広告も見かける。限定的な仕事であれば問題はないのであろうが，基礎修練を積まずにデザイナーになった際，専門外のことまで総合的に判断することが困難となるのは想像がつくところである。

経験として学んだのは書の品性は修練により養われるということだ。それはどんなに荒々しく書いても線の美として浮き上がってしまう。誰もが一度は学校で習っていた書道であるから，万人が書けるため価値判断を難しくさせてしまっていることも事実である。ではどこで価値を測るのか。それはやはり目である。線の美しさ，間の取り方といったことはデザインでも共通する部分であって修練により目を養えば判断できないことではない。それはグラフィックデザイナーがこのデザイン書道の世界を築いてきた歴史が物語っている。

私はデザインに関わる方々に筆文字にも冷静なジャッジをしていただきたいと思う。「そこは筆文字でなくてもいいね」という選択肢もあるだろう。同時に書道を専門とする我々も同じ言葉を肝に銘じておかねばならない。どうやって品性を修練するか。それは古典と正面から向き合うことである。書道にも古典がある。古典を学ぶ重要性において書家，デザイン書道家の区別はいらない。美しきもの，品格を知ってこそオリジナリティは生まれるからだ。

もちろん私もまだ途上にある。今出せるすべての力で，商品を広める一員となれることが幸せであると感じている。■

＊直恵
デザイン書道家
https://naoe.chiba.jp/
info@naoe.chiba.jp